①子どもたち一人ひとりの主体性を伸ばし、自己肯定感を育む関わりを大切にしていきます。

毎日の生活や遊びを充実させるために、子どもの発達に応じたねらいを明確にし、子どもの意見や意欲を反映した活動を実施します。

⇒平成 29 年 4 月 1 日は定員 15 名のところ、14 名の措置児童と 1 名の一時保護でスタートを切った。幼稚園就園児が 7 名でのスタートであったこともあり、子どもたちの発達に応じて、関わりの幅を広げる取り組みを心がけてきた。

特に幼稚園就園児については、自分自身の生い立ちを振り返ることを担当保育士と実施したり、「三つの家」を使った個別の時間を取り入れる中で、子ども自身の「不安」、「安心」、「希望」に担当職員と共に向き合う取り組みを実践した。また、プレイセラピーの振り返りを心理職員と担当保育士で丁寧に行い、関わりにフィードバックすることができた。こうした取り組みを通して、普段何気ない様子で生活をしている子どもたちの気持ちの奥に触れ、子どもたちの観察力の鋭さや、かがやきの職員や親、里親候補者の人間性をしっかり見抜いている姿に驚きを感じる機会となっている。

②子どもの育ちが大切につながり続けるように、子どもを取り巻く家族、里親、施設職員との連携を実施していきます。

子どもの育ちは、どのような環境で養育される場合においても、愛情豊かに生きる権利が守らなければなりません。子どもが大切にされた実感できるつながりの構築について、取り組みを深めていきます。

⇒今年度は「ちょこっと会」と称して、麦の穂学園の小学生とその担当職員と共に、おやつ作りをしたり、かがやきに居た頃のエピソードや生活していた部屋、遊んでいた遊具などを紹介し、アルバムや映像記録でその当時を振り返ったり、乳幼児とふれあう取り組みを継続して実施した。かがやきに入所していた頃に担当していた職員が中心になって企画し、退職した元担当職員もかがやきに招くなどして、当時を知る職員といきいきとしたエピソードを振り返る中で、「大切に可愛がられていた」という雰囲気を感じ、児童養護と乳児院の担当職員同士もつながろうということ意識して企画している。

特別養子縁組となった子どもや里親さんとも里親サロンでお会いしたり、法人全体の行事である「子どもフェスティバル」にお誘いをしたところ、多数の里親家庭が来園してくださり、子どもの近況報告や成長発達で感じている喜びや戸惑い、悩みなどを聞く機会に恵まれた。

子どもの育ちを大切につながり続けるためには、乳児院職員の視野も今まで以上に広く豊かにしていく必要性を改めて感じると共に、退所後の子どもの様子に触れられる喜びを味わうことができた。

③子ども相談センター(児童相談所)と近隣市町村との連携を強化し、地域全体の子育て支援の取り組みが今まで以上に充実したものとなるよう努めていきます。

法人内の子ども家庭支援センターとも協働し、市町村の要保護児童対策に積極的に参画し、要保護児童や要支援家庭へのきめ細かな支援ができるよう働きかけます。

⇒年度の途中で里親支援専門相談員が退職し、子ども家庭支援センターの職員の業務量が急激に増大することになってしまった。地域の子育て支援に加え、里親支援業務を充実させるためには、法人内連携を今まで以上に密に行い、情報の共有化や、具体的な援助方針の確認の大切さを再度確認していきたい。

平成 29 年 8 月 2 日「新しい社会的養育ビジョン」が発出されて以降、地域全体で子育て支援を充実させる難しさと、人員の確保の重要性や多機関連携の必要性を痛感している。乳児院の実践を丁寧に行うための、本体施設機能の充実を国に訴えているものの、乳児院や児童養護施設において、日々展開されている実践の重要性が、なかなか理解されていない現実に直面している。しかし、このような時期だからこそ、乳児院、子ども家庭支援センター、児童養護施設が力を合わせ、大切に守るべき子どもを中心に置きながら、地域の子育て支援に具体的に関わる意識と体制づくりに向けて、前向きに取り組みを深めたい。